父、東京へ――苦学の思い出――

小倉　一純

北関東の小さな町に男ばかりの三人兄弟がいた。大正十四年、その次男として生まれたのが私の父である。

この町、現在の埼玉県羽生市は、北側には利根川が流れていて、水田が多く稲作が中心である。しかし、昭和三十五年に利根川に立派な堤防が築かれるまでは、それも一筋縄ではいかなかった。

父は、運動神経のいい子供だった。尋常小学校のときには徒競走でいつも一番をとっていた。歌が得意だった。小学校の行き帰りにはいつも唱歌を歌っていた。

そんな父は町の大天白神社（だいてんばくじんじゃ）の池で溺れたことがある。大人なら背の立つ水位だった。母親に助けられた父は、これを機に泳ぎの猛練習をはじめた。

近くに農業用の水路が流れていた。幅が五メートルはあるだろうか。水源である利根川の近くだから流れが激しい。最初はこの用水路にある馬の洗い場で体を慣らし、徐々に流

れに逆らって泳げるようになっていった。
父はこのときに体の基礎をつくったといつも自慢気に話していた。そして皮肉にもその頑健さが苦学する父を助けることになる。
さて、父の祖父つまり私の曽祖父は、同じ町の三木家から小倉家に迎えられた婿養子である。三木家というのはかつての士族で代々名主をつとめる家柄だった。
その祖父には弟がいた。羽生町の町長を、明治二十四年から二十年の長きに渡ってつとめた人物である。姓名を三木辰五郎（みきたつごろう）という。
尋常小学校の成績もよかった父は、一時期、この三木家の養子に望まれていたことがあった。辰五郎には八重という娘がいた。八重は婿をとり酒屋を営んでいた。その八重夫婦の養子に、ということである。ところが、事情が変わり、養子の話は立ち消えになってしまった。
父が自慢気に冗談半分で言うことがある。
「俺が三木家の養子に入っていれば、お前も

今ごろはお坊ちゃんだったのに」

しかし、その場合、そこに生まれるのは私ではないだろうと思うが、どうだろう。

大学進学を目指していた父は、卒業も近い尋常小学校六年の夏、十二歳で東京へ出た。父親（私の祖父）のはからいで東京の佐竹家へ預けられ、秋以降は近くの尋常小学校に通うことになっていたからである。佐竹というのは祖父がまだ経済的に余裕があったころに面倒をみた人物である。ところが佐竹家では、父は、希望とは裏腹に、青年学校へやられてしまった。青年学校では大学に進学することができない。それで父は仕方なく佐竹家を出てしまう。金もなく、下宿もなく、今でいうホームレスの一歩手前だった。

長兄は一足先に東京に出て働いていた。佐竹家は金属加工の工場を経営しており、実は長兄はその住み込みの従業員だった。父は、家は出たものの寝泊りするところがないので、夜になると佐竹には内緒でこっそり兄の寝床

に潜り込み、一夜の宿を借りた。その長兄からはときどき小遣いをもらうこともあった。

そんな父は自力でなんとか落ち着き先を探そうと、新聞広告で見つけた益田家の書生に応募する。手元には筆や墨もなく、急いでいたので万年筆で履歴書を書き、益田家の屋敷を訪ねて執事に見せたところ、

「こういうものは毛筆で書かないとだめだよ」

と注意されたという。益田家というのは三井家の大番頭をつとめる家柄である。結局、その益田家には採用されなかった。

今度は荻窪の沓掛町（くつかけちょう）にある子爵の風早家（かざはやけ）の書生に応募した。益田家の執事から注意されたことを守り、今度は毛筆で書いた履歴書を持って行った。しかも運のいいことに、風早家の女中頭は父と同郷であった。そういうことも功を奏してか、父は書生として採用された。

さて、風早家では毎朝、味噌汁の代わりにシチューをいただく。といっても父が華族の

方々と一緒に食事をするわけではなく、女中たちと座卓を囲むのである。風早家には、近しい関係に伯爵の三条西家（さんじょうにしけ）というのがあった。そこから女中を介して、時折、父に薪割りの仕事の依頼などもあった。

せっかく得た書生の立場だったが、事情があり、一年ほどで辞することに決めた。そして今度は、本郷の外語研究社という出版社でアルバイトとして働くようになった。この出版社はときどき文化研究社という社名でも本を出版することがあった。のちに赤尾好夫の旺文社に合併される。

父の仕事は書店に本を配達することだった。普段は神田などの近場に徒歩や自転車を使って配達する。ときとして、主に週末だが、臨時手当をもらって近くは六本木の誠志堂（せいしどう）や渋谷の大盛堂（たいせいどう）、遠くは横浜の有隣堂（ゆうりんどう）まで本を運ぶ。途中には坂道もあり、本を積んだ重量のあるリヤカーは、とくに下り坂では自転車のブレーキも効かなかった。

お腹が減るので大福を食べ、さらには夏の暑さしのぎに屋台でかき氷を食べたりすると、その日にもらう臨時手当の金額を上回ってしまう。ちなみに当時は、芝公園の近くに「塩大福」を売る店があった。中のあんこは塩だけで味がつけてある。それを、別に用意した砂糖をつけていただくという趣向である。これがとても美味かった。

出版社からはときどき、本の配達のほかに簡単なお使いを頼まれた。本の奥付（おくづけ）に貼る検印紙を著者のところに持って行き、後日、著者によって捺印されたものを回収して、出版社へ届け戻す仕事がそれだ。

奥付とは、本の巻末によくある、書名、著者、発行者、印刷者、出版年月日等を書いている部分である。またこの当時は、出版部数のチェックなどが目的で、著者自身が切手のような検印紙に捺印していた。捺印済の検印紙は奥付に貼りつけられる。

いろいろな著者のところへ行ったが、父に

とっていちばん印象に残っているのは水泳の清川正二（きよかわまさじ）である。

清川氏は昭和十七年、十九歳のとき、ロサンゼルスオリンピック百メートル背泳ぎで金メダルに輝いた。日本人では初めての快挙である。二十三歳のときにもベルリンオリンピックに出場して銅メダルを獲った。その翌年、大学を卒業して兼松商店（現兼松株式会社）に入社し社長にまでなっている。さらにオリンピックの大会運営にも尽力し、日本人としては初のＩＯＣ副会長に選出される。

さて、話は当時へ戻る。兼松商店の本社が入ったビルの三階か四階に清川氏の席はあった。清川氏を訪ねると、彼は必ず金平糖やチョコレートをくれた。本を増刷するたびに検印紙にも追加で捺印してもらうので、いくども通ったのだと思う。その当時父は十七歳だった。清川氏は父よりひと回りうえの年齢であった。

清川氏からは、海外出張の土産話などもよ

く聞かされた。そしてなによりも、いつも優しい笑顔で迎えてくれたことが、苦学生の父には何よりの励ましとなった。

昭和十七年のことである。翌々年の年末には、米軍機による本格的な本土空襲が始まる。

窓の外に目を遣ると、八月の太陽がジリジリと地面を照りつけている。もうすぐお盆である。私の二人のおじたちは、今は北関東の小さな町の古刹に眠っている。まわりには田んぼが広がり、稲が穂を出している。今年もまた父を連れて、二人の笑顔に会いに行こうか。

五年前、私はこの作品で、随筆春秋の奨励賞を獲った。生まれて初めての文学の賞である。これを契機に私は、高校のころからの夢だった文筆家を目指し、毎日机に向かうようになっていた。そんな最中、父が在宅医療・介護の末、九十五歳の天寿をまっとうした。

二〇二一年春のことだった。　了